実用スペシャル

過去・現在・未来を見透かす神器の操作法！

「天津金木」秘占秘儀

かつて、太古の日本には、
神々の叡智を凝集した
恐るべき秘術が存在した。
たとえば「天津金木」である。
遠い過去から遥かな未来まで
見透かすことができ、
さらには森羅万象の真象をも
知ることができるという神器。
だが、その運転操作法は
神霧に閉ざされたままである。
ここでその秘奥を明かそう！

文＝大宮司朗
イラストレーション＝五十嵐晃

第1章 神の叡智を凝集した超古代日本の秘術

謎の秘術を捜し求めた大石凝真素美

日本屈指の神道オカルティスト大石凝真素美は、『大日本言霊学』などを著して、近代神道霊学の礎を確立した古神道界の巨人である。この人こそ、太古から伝えられる謎の秘術「天津金木」を人々の前に明らかにした人物であった。

大石凝真素美――改名前は望月大輔という。望月家は滋賀県南部の甲賀にあって、その祖は大伴氏にさかのぼることができる名家だった。この望月家で、大輔は若年より天賦の才が見出されていたようである。

機が熟する日を待って祖父・幸智は、大輔にその師・中村孝道から伝えられた言霊学を伝授し、奥伝に天津金木学なる秘術が存在することを教えようとした。

断るまでもないが、中村孝道は『水穂伝』の著者・山口志道と並ぶ言霊学の大家であり、望月幸智はその高弟として知られた人物。だが、言霊の全伝と天津金木の秘奥を伝授する前に幸智は逝去し、それから望月大輔の秘奥を求めての探索と修行の日々が始まったのである。

日本の北から南まで、大輔の修行と探索の日々が続いた。そして、ついにたどり着いたのが美濃国不破郡（岐阜県南部）の山本秀道の宅であった。

山本家は大変な旧家で、『大日本史』には美濃の豪族が天武天皇を使役し奉ったことを記しているが、その豪族こそが山本家の遠祖であった。時は慶応3年（1867年）、大輔36歳のときである。

山本家は、鬱蒼とした杜に囲まれた美濃国一の宮の南宮神社の近く、太い注連縄の張りめぐらされた門構え、神さび、神気満ち満ちたたたずまいであった。

奥の部屋に通された大輔は、長い顎髭をたくわえた、顔立ちの柔和な、しかし、あいまみえる者にすさまじいばかりの霊圧を与える初老の男と対面した。そして、己こそはと自負していた高慢の鼻を完膚なきまでに叩き折られ、深く膝を屈して師事したのである。

その人こそ山本秀道であり、まさに神通自在、一世の大神人にして国家鎮護の大聖師なりと世に知られた人物であった。

しかも霊妙なことには、山本家には代々、御神体として「天津金木」が伝えられていた。秀道からそれを見せられたとき、これこそが祖父・幸智のいっていた神器であることが、大輔には即座にわかった。だが、秀道の時代にはその運転操作の法は絶えていた。「しかし、お前なら神迎えすればわかる。ここで研究してみろ」と神業を促されたのである。

⬆古神道界の巨人、大石凝真素美こそ、太古から伝えられてきた秘術「天津金木」の謎を解明した人であった。

➡真素美の祖父であり、言霊学を修めていた望月幸智。

⬅神鏡「ますみの鏡」は、言霊の玄理を象徴的に照らしだす音の図表である。

神懸りで解明できた天津金木の秘奥

神界の導きによって出会った山本秀道と望月大輔こと大石凝真素美。彼らの研究と修行が始まった。秀道は真素美が天津金木の秘奥を解明できるようにと昼も夜も神に祈り、真素美もまた神に祈りつつ天津金木の研究に専念したのだ。

それにしても金木は、不思議な方柱であった。何の変哲もない長方形の木片群。だがそれは、祖父・幸智によれば「天地開闢以来の経綸のいっさいを写しだすことができる」神器なのだという。

惜しむらくは、その操作法・応用法などは、幸智の思いがけなくも早い逝去のために、皆目、知らされなかったことだ。

真素美はひとり部屋にこもり、金木を前にして、「この神器にはどんな意味があるのか、どのように操作するのか」と思考錯誤を繰り返したのである。

ある日のこと、真素美はふと、金木がある形になることを欲しているのを強く感じた。その感じに従い、金木を手に取って並べはじめたそのときである。それまで漠然として思考も形も定まらずにあった何かが、真素美の内ではじけるようにして沸きでてきたのだ。

そして、真素美の念が金木に凝集するやいなや、その形象を中心として空気の色が変化し、空間が揺らぎ、別世界の異空間を体感したのである。

こうしたことはそれ以後、何度も体験することになった。

天津金木によるそうした体験を重ねるにつれ、さらには日々、秀道の高い霊格に接することによって、真素美の霊的資質は日増しに輝いていった。そしてついに、決定的な日がやってきた。

こもりきりで研鑽に励む真素美の部屋から、突如、雷鳴のような轟音が響きわたったかと思うと、屋敷全体が震えはじめた。秀道はすぐさま真素美の部屋の障子を開いた。と、そこには五色の光が乱舞し、真素美は鎮魂帰神(神懸り)状態になっていた。

事態を察した秀道が審神者(神の高下を明察し、神託を解釈する人)となり、真素美が天津御船(神主、霊媒)となって、森厳なる神懸りが行われた。天津金木をはじめとする古神道の謎は、こうして解明の緒についたのである。

その事情は真素美の霊著『天津神算木之極典』に「此の身を天津御船として、夜となく仕となく神等を此の御船に乗せ奉りて云々」と記され、天津神、国津神をはじめとして、特には武内宿禰の降臨のあったことが記述されている。

その過程において、自分が『古事記』撰録にかかわった人物のひとり、稗田阿礼の生まれ変わりであること、しかも霊統としては、師の秀道は天の岩戸開きに際して活躍した玉祖命、自らは石凝姥神の系統を受けていることを知るのである。

つまり2人が出会い、共同して研鑽することは神代からの神定めであり、天照大御神の岩戸隠れのときのように、光を失いひたすら闇の世に向かおうとするこれからの混濁の世に際して、それを導く指針としての天津金木を中核とする三大皇学(次の章で明らかにしよう)を残すことが2人の使命であったのだ。

明治6年になって、望月大輔は大石凝真素美という名前に改名する。その名は、石凝姥神と、その神が作られた神鏡「ますみの鏡」から採った。「ますみの鏡」は、また言霊の象徴である。

天の岩戸開きにちなんだこの名を大輔が名乗ったということは、闇の世に突き進みつつある現状において、天の岩戸開きの担い手のひとりとしての、自らの使命を深く自覚したということでもあったのである。

宇宙の過去・現在・未来を見透かす神器

さて大石凝真素美が、山本秀道の助けを得て研究研鑽し、神懸りなどによって解明した天津金木学とはどんなものなのか、また何をするものなのかを明らかにしていこう。

そもそも天津金木とは「延喜式祝詞」の中に、

「天津金木を　本打ち切り　末打ち断ちて　千座の置座に　置き足らはして云々」

と記されている言葉だ。

天津とは「神の」とか「神聖な」という意味、金木というのは「細い木」のことをいう。

多くの推測はあったのだが、その正体は幽遠な昔より神霧に隠され、大石凝真素美などが公表するまで知る人は稀だった。

真素美によれば、一柱（金木の数え方は、本ではなく柱を用いる）の天津金木は大宇宙の縮図、すなわち一個の小宇宙であるという。同時にその運転操作は、神々の神業霊動をそのままに写映したものであり、天津金木にはいっさいのことが秘められているという。

したがって、天津金木を操ることにより、つまり方柱の天津金木を一定の原則に従い、平面的、もしくは立体的に幾柱も組み合わせていくことによって、神典『古事記』の真の意味を解読し、宇宙の造化生成、森羅万象の真象を知ることができる。

同時に、その神器を操作する者は、神器と形象の作用によって、宇宙の過去・現在、そして未来をも、神秘的領域において実体験することができるというのである。

例をあげれば、万有万生を産霊だされた伊邪那岐、伊邪那美二柱の神が、天の浮き橋の上に立たれて、天の沼矛を塩コオロコオロにかきなした『古事記』の状は、一柱の天津金木を立て、その側面に四柱の天津金木を置き並べることによって示される（下の写真参照）。

そうして、この形に置き並べた天津金木を見つめていると、その形象が暗示するさまざまな意味が少しずつひらめいてくる。

だが、天津金木の働きはそれだけではない。習練によって観想力が次第に強くなると、ついには左旋内集、左旋外発、右旋内集、右旋外発する大きな力の渦を感じ、宇宙創造の原初的な風景にまで接することができるのである。

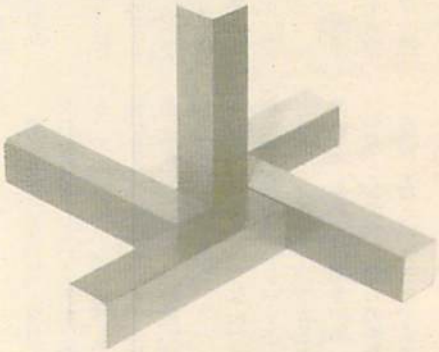
このような、天津金木の淵源は、『古事記』において、伊邪那岐、伊邪那美の神が天津神に賜ったとされる「天の沼矛」にある。天の沼矛は森羅万象を生成する神器であり、同時に宇宙の縮図でもある。

ちなみに、この天の沼矛を象ったものが、伊勢神宮の深秘とされる「心の御柱」なのだ。

←「延喜式祝詞」は、平安時代の『延喜式』第8巻に収められている（東京国立博物館蔵）。

➡一柱の金木を屹立させ、その側面に四柱の金木を置き並べた形象が、天津金木の基本相。この相には驚くほど深い意味があり、観想を積むほどに、さまざまな玄理が霊悟されるという。

⬆伊邪那岐と伊邪那美の二神が天の浮き橋に立ち、天の沼矛を手にして国生みを行っている図（山辺神社蔵）。



大宇宙の霊と体の両面を顕す天津金木

宇宙の創造者、あるいは宇宙そのものの縮図でもある天津金木は、霊・体両面から観察することができる。

霊的に見るときは「御霊代」といい、体的に見るときは「御種代」という。大宇宙の霊と体を、そのまま小さなものに移したのが天津金木なのである。

つまり金木は、霊的に見て四魂、体的に見て四体をも象徴するものとなっている。

四魂というのは、「奇魂」「荒魂」「和魂」「寝魂」をいい、四体という

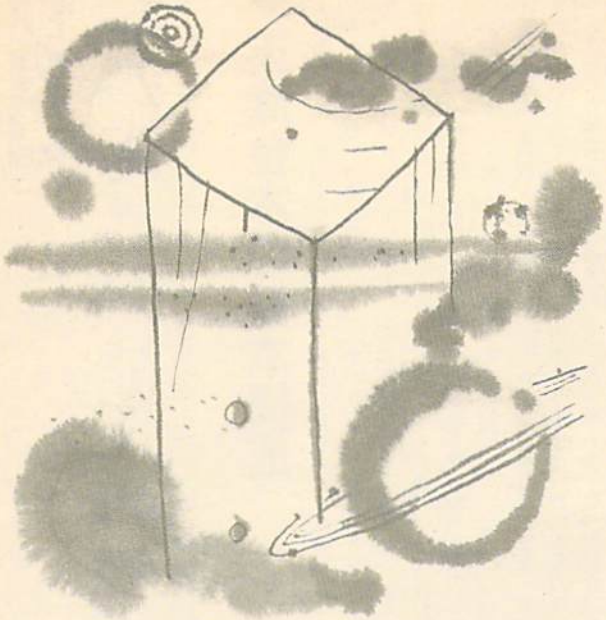
のは「精体」「気体」「液体」「固体」をいう。

ちなみに、奇魂とは奇しき魂という義で、神通力自在の魂。超意識状態で、普通では理解しがたい不可思議を顕すことのできる魂である。

荒魂は普通の意識状態をさすもので、別名「動物性魂」とも呼ばれる。和魂は半意識状態をさすもので、別名「植物性魂」とも呼ばれる。寝魂は寝ている魂という義で、無意識状態をさす。別名「鉱物性魂」とも呼ばれる。

また「精体」というのはラジウム、電気、光熱などの超物質の意味であり、「気体」「液体」「固体」は物理学上でいう気体・液体・固体と考えてよいであろう。

天津金木が内包する四魂四体は、その根本を宇宙の一大人格に発しており、それは同時に、霊・体を有する万有とも有機的関連を持つものなのである。



物質的文明から霊的文明への掛け橋

このように、一柱の天津金木にも天地いっさいの情報が記されている。そのことは天津金木を〝宇宙を写したホログラムの一断片〟と考えてもらえばわかりやすいだろう。

ホログラムとは、ホログラフィー（物体像などを3次元的に再現できる立体写真）の感光板だ。

レーザー光線などをハーフミラーで2つに分け、その一方を写したい物体に当て、そこから得られる光（作業光と呼ばれる）と、もう一方の光（参照光と呼ばれる）との干渉パターンを、感光板に撮影・記録する。そうして作られたものをホログラムというが、これにレーザー光などを当てると、物体像を3次元的に再現することができるのだ。

ホログラムの特徴は、それに含まれた情報を立体的に再現するだけではない。「全面分布」という性質を持っているため、先の方法によって得られた感光板をいくつに割っても、その一片に光を当てると、精粗の差はあれ、写された物体の全体像を得ることができるのである（その一片が大きいほど精密な全体像が得られる）。

宇宙を写した一柱の天津金木は、どのホログラムの一片も、大小にかかわらず全体情報を持っているのと同様に、宇宙いっさい合切すべての情報をそこに保有しているのだ。

そして、よりいっそう精密な情報を得るには、それを2つ、3つと組み合わせていけばよい。ホログラムの一片が大になれば、よりいっそう精密な像を得ることができるのと同様なのである。

したがって、天津金木を一定の法則に従って、平面的もしくは立体的に幾柱も組み合わせて操作するときは、天地開闢のありさまから、生成化育する宇宙の進展の様相、宇宙に働く根本玄理、また森羅万象、人事百般、およそわからぬことはないとされるのだ。

と同時に、その神器を操作することは、小宇宙であり、小天之御中主神でもあるわれわれが、造化神（天之御中主神）によって成された大造化を、神秘的領域において追体験することでもある。

ともあれ、大石凝真素美が予見していたように、現代は西洋文明に行き詰まりが生じ、さらに大きな変動の波にさらされている。つまりは〝開の世〟である。

これに対処して、今の世における天の岩戸開きをなさしむべく、真素美はその鍵ともなる天津金木の秘法をわれわれに残した。それは物質的な文明から霊的な文明への掛け橋ともなるものである。

しかし、後世に託されたこの古神道の秘器の活用と運用、また自ら霊的文明の先駆けとなって天の岩戸を押し開くかどうか、それは読者にまかされているのである。

第2章

顕幽両界の扉を開く天津金木と皇学の秘密

◆天津金木の基本構成

「天津金木」は、形の上では「天の沼矛」を象った伊勢神宮の「心の御柱」を2500分の1に縮小したもので、四分角二寸（約12ミリ×60ミリ）の檜材で作られた方柱である。

4面は、宇宙を構成する要素と考えられている天・火・水・地になぞらえて、青色・赤色・緑色・黄色と彩色を施し、上下の2面は、上側には白色、下側には黒色が塗られる。

また、いっさいは数からなるところから、4面に「●」点によって1・2・3・4の数を示す目盛りが施してある。

「おや、数は1から10までの10数が基本であり、それが限りなく結合して万象を数的に表しているはずだ。1から4の数では足りないのではないか」

と考える読者もいるだろう。その心配は無用だ。ピタゴラスなどもいっているように、1・2・3・4の4つの数は、基本中の基本数である。全部を合すれば10となり、ほかの5も6も7も8も9もこの基本数から発している。しかも、点、線、面、立体といった諸形態も、この基本数に帰するものとなっているのだ。

ついでに言及しておくと、天津金木の基本相といわれるものは、天・火・水・地となっており、それぞれに1から4までの目盛りを与え、1点を天に、2点を火に、3点を水に、4点を地になぞらえている。

ちなみに真言密教では、十指でさまざまな印を結んで宇宙の真義を写象しているが、金木は密教における印契に相当するものである。しかし、印契と違って金木は、その配列の数を増すことによって内容を詳細に開顕することができるので、その効験のほどは比較にならないものがある。

◆天津金木の謹製法

さて、天津金木を自ら謹製しようとする読者のために、謹製法を簡単に紹介しておく。

上質の檜を用い、四分角二寸（約12ミリ角で長さ約60ミリ）の角柱を制作し、木の根のほうを本としてそこに墨を塗り、木の末のほうには白粉を塗る。

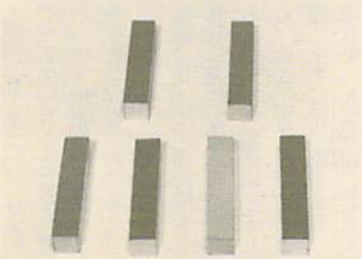
そして、墨を塗った面を下にして角柱を直立させ、正面（木の外皮側の面）に青、裏側（木の中心に向かう面）に黄色、向かって左側に赤、右側に緑を塗り、それぞれ万有を構成する要素である天・地・火・水を象徴するものとする。

ただし実際には、角柱のどちらが根のほうでどちらが末であるとか、外皮に近いほう、中心に近いほうなどを確認し、制作することは困難である。だから、これは本である、これは末であると見立てて（観想し、思い定めること。古神道においては重視される概念である）色を塗ればよい。

そして、本来ならば数量を示す点も書き込むべきであるが、観想あるいは操作法上、点があると不便な場合もあり、あえて書き込む必要はない。

特別付録として簡便な天津金木をつけておいたが、だいたいのことはそれで用が足りるだろう。ただ、より深く研鑽しようとする人は、ぜひ自分で制作し、基本的には三十六柱を用意してほしい。自ら天津金木を作るという過程自体にも、深い意味があるからだ。

また、付録の天津金木は、簡易な代用品と考えての粗略な扱いは避けてほしい。ひとたび操作しようとするときには、代用であっても神器へと変化するからだ。



⬅茎で作った天津菅曽。⬆謹製された天津金木。

◆霊的世界をつくる三大皇学

さて、大石凝真素美が未来を予見し、霊的な世界確立のために神助を得て開顕した天津金木学は、実は三大皇学といわれるものの一部なのである。

では、三大皇学とは何か。それは次の3つだ。

①天津金木学（別名、日本神相学）
②天津菅曽学（別名、日本心霊学）
③天津祝詞学（別名、日本言霊学）

それぞれの名は、かの大祓祭に奏上される大祓詞に由来するもので、

「天津金木を　本打ち切り　末打ち断ちて　千座の置座に　置き足らはして、
天津菅曽を　本刈り断ち　末刈り切りて　八針に取り辟きて、
天津祝詞の太祝詞事を宣れ……」

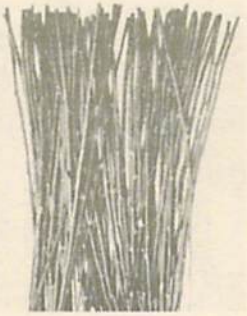
とあるのがこれである。

天津金木学についてはすでに述べてきたが、別名を日本神相学というところからも明らかなように、形や様相などを見て、その形や様相が含蓄している玄意を究める学術だ。

天津金木を用い、神々の様相から、御所持の鏡、玉、剣などのいっさいの宝具をはじめとして、森羅万象をことごとく子細に研究できるところのものである。

天津菅曽学というのは別名を日本心霊学ともいわれるもので、吾人の心霊が直接宇宙の本体に触れていくことによって、いっさいを研究する学術。神の意志に修行者の意志がただちに感応し、道交していくという実に深刻な研究方式である。

それには、修行者の体験のみによって行う方式、神と修行者の間に神主（霊媒）を使用する方式、天津菅曽という細い植物茎を使用して行う方式がある。日本心霊学においては、最後の天津菅曽を用いる方式を本位としているので、



天津菅曽学というのである。

天津祝詞学というのは、別名を日本言霊学ともいう。宇宙に霊動し、森羅万象を生成化育している言霊、つまり大いなる言葉をいっさいの研究基盤とするところの学術である。

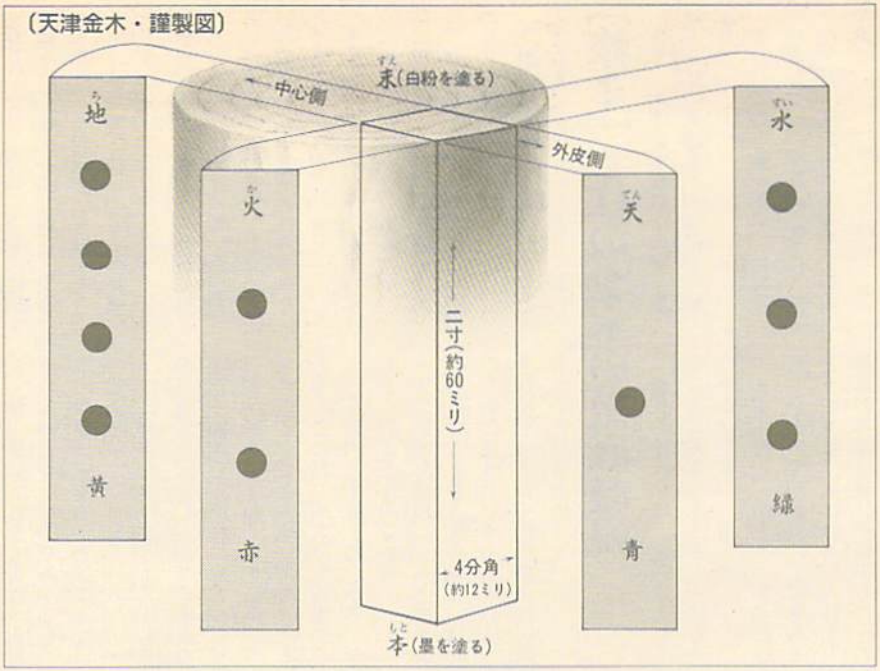
この三学は密教における身口意の三密（手に印契を結んで身密、口に真言を唱えて口密、心に本尊を観想して意密という）に相応するもので、天津金木学は身密学、天津菅曽学は意密学、天津祝詞学は口密学ということがいえよう。

元来、三学一体のものであり、全学を修することが望ましいのであるが、どれかひとつだけであっても、その深奥に至れば天地いっさいを知り、神通自在の境涯を体験できるとされている。

そこで今回は、これまであまり紹介されたことのない天津金木学を公開しようというわけである。

それでは、天津金木の概略がわかったところで、実際の操作法に入っていこう。

（天津金木・謹製図）



第3章 天津金木観想法

最初は観想法である。天津金木の観想法は、金木の配列や運転および変化を観察して、天地の玄理を発見したり、万物、万象の性相を種々に正観する法である。天津金木学は、この観想法を徹底することによって、はじめてその真価を十分に発揮するとされる。

さて、古来、観想法の修行にはいろいろな作法が伴っていた。あるいは潔斎（心身を清める）、あるいは禊祓い（水で清めはらう）などである。

そうした形式的な作法も決してゆるがせにはできないものだが、特に重要なことは、心の備えである。つまり、修行にあたっての心の持ち方が大切なのだ。

これは古神道においては「赤心」とされる。清明な心であり、誠の心だ。鎮魂帰神法の中興の祖とされる本田親徳も「霊学は浄心を以て本となす」と喝破しているように、汚（気枯）れた心では、古神道のどのような行法であっても、その堂奥に達することはできないのである。

特に天津金木の運用は、日本国の真実義を顕示し、神々の末裔たる己を顕現し、それにもとづいて善根功徳をあまねく衆生に施し、天にあるがごとく地にあらしめる、つまりこの世に高天原を実現することを目的とするものだから、なおさらのことなのである。

天津金木を運用しようとする人は、少なくともこれを正しい目的のために使うという清明な心持ちを保持し、それぞれの修法に邁進していただきたい。

[修1] 一柱の金木の徹底凝視

さて、天津金木観想法の第一歩は、一柱の天津金木の凝視から始まる。

まわりに心を動かさず、息長の呼吸をしつつ、至誠の念を持って、ひたすら一柱の金木を凝視するのである。

息長の呼吸法は、流派によってやり方に差異はあるが、そのひとつを紹介する。

まず正座し、頭をまっすぐに保ち、鼻と口の線が臍の上に落ちるようにする。肩には力を入れず、身体の各部に凝りが存することのないよう、つまり「天の浮き橋」の状態をとるのだ。そして、臍下丹田に心を集中しつつ、ゆっくりと腹式呼吸を行うのである。

臍下丹田は、すなわち神典にいうオノコロ島であり、ここに精神を集中して、天の御柱（信念の御柱）を立てるのである。そこから霊的修養のいっさいが始まる。

付録の天津金木を用いる場合には、まず、天を示す青色金木一柱（一枚）を橙色の「観想盤」の上に置いて観想する（初心のうちは●点のない金木を使うとよい）。

次いで、火を示す赤色金木を緑色の盤、水を示す緑色金木を赤色の盤、地を示す黄色金木を紫色の盤の上に置いて、それぞれ観想するとよいだろう。

このとき補助的に「スメ、タカアマハラ、ミコト」という言霊を繰り返し唱えるのである。

これを続けていると、青色に青光あり、赤色に赤光あり、緑色に緑光あり、黄色に黄光ありというように、あたかも天の岩戸が開いたかのように、各金木が光を放ってくる。

そして、精神集中の極点に至ったときには、そこに雲ただよう天を見、あるいは燃え上がる炎を見、またあるいは清く流れる水を見、あるいは万物を載せて磐石たる大地を見るのである。

しかし、最初からそんな簡単に事象が見えてくることはまずない。

最初は、光が見えはじめたら、目を閉じてまぶたの裏に残っている金木の残像を見つめるのである。あるいは心の目で、その金木を見つめるのである。金木をありありと思い浮かべ、それと自らが一体となったと感じられるように努め

るのだ。

金木の残像を保持できるようになったり、あるいは心の目で見つづけることができるようになったならば、その中に、天・火・水・地の様相、あるいはその混合変化したものが出現することを冬空するのである。

すると、目の前に見える残像あるいは心像は刻々と変化し、さまざまな事物、風景、あるいはなんともわからぬ文様が見えてくる。

【修2】金木の配座・配列

こうしたことがある程度できるようになったならば、次には天津金木を幾柱か配座し、さらにはそれを発展せしめた配列を凝視する。

そこに現前するものは天地の開闢かもしれない。あるいは、未来の風景であるかもしれない。

それらは宇宙構成のひな形、星雲・星座のひな形、いっさいの天界の諸現象の組織相、神像相、桐葉御紋章相、三種の神器相、地球相、人体相、人生の一代順律相などを示すものとなっている。

だがそれは、各種の金木配列を徹底的に観想することによってしか得られない。付録の金木を使って配列を形づくったならば、一柱の観想と同様の心持ちで、至誠の念を持ってひたすら行に励んでいただきたい。

天津金木の配列には、螺状配列、雲状配列、段階配列、円輪配列、蛇状配列などがある。左図を参考に各自、研鑽していただきたい。

【修3】金木の運転変化

さらに行が進むと、ある配列からある配列への運転変化を行う。

その場合においても、単に動かすというのではなく、観想法が用い

◆螺状配列

基本相

基本相

◆雲状配列

基本相

金木の配座・配列は、天津金木運用の要である。中心基本相の配座から始め、それを伸展拡大することで配列となし、結合全相の妙諦を観想するのである。

たとえば、螺状配列においては、基本相である「天の沼矛」の配座から発し、上の左旋（向かって右旋、本質は左旋）と、下の右旋（向かって左旋、本質は右旋）が結合して、最終的な螺状配列となる。

ほかの各配列も同じこと。基本相を徹底観想すれば、ひとつの玄理が見出され、その筋道をたどって最終の結合が得られるのである。

◆段階配列

基本相

◆円輪配列

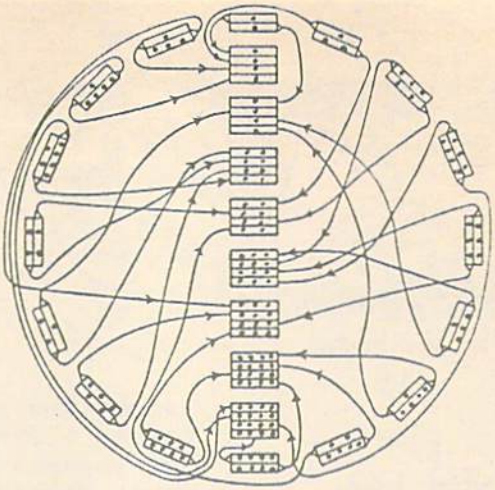
基本相

◆蛇状配列

蛇状配列は基本相のみ示した。伸展相は次ページ図の中央柱を参照のこと。

られる。

例として左図に、円輪配列から蛇状配列に移る運転変化を示した。これは、天地いっさい合切を集めきたって、その中央に包蔵するところの作法であるから、修行者は自らの一身の中へ、乾坤（天地、陰陽）ことごとくを集めきたるとの思いをなし、大我発揮の修行として至誠に行わなければならない。



また逆に、蛇状配列から円輪配列に運転変化する場合には、わが身を無限に伸長して全天に及ぼす作法であるから、その心持ちを持って行わなければならないのである。天津金木の草船に乗って、自己の身体を天底まで伸展させ、さらに全宇宙を呑吐して、これを自己の腹中に集めきたるのである。

これは「天の鳥船の作法」と名づけられ、わが身に宇宙いっさいを包蔵せしめる作法とされている。

このように天津金木と自己とが一体となり、不即不離の観想に成功すれば、天津金木の霊応によっていっさいが分明となってくるのである。

つまりこの観想法を徹底すると、しまいには自然に無念無想の天津金木三昧の境地に入り、理屈ではなくて純粋体験として、各種の境涯を経験できるようになるのだ。

こうした体験を通じて、読者は自らが造化神である天之御中主神の一霊をうけた小天之御中主神であることを、霊悟するようになる。そうなれば、天地乾坤いかなるところに起こる事柄も、これを感知し、これを直観することが可能になってくるのである。

この観想法に習熟することは、これから説明する天津金木の秘占法においても重要である。もし読者が観想法に習熟しないままならば、いかにすばらしい天津金木であっても画竜点睛を欠くというものだ。

まずは、一柱の金木観想から始めることである。その神業に励むならば、読者はおのずと次の段階への理解が芽生えてくるのを感得できるだろう。

第4章 天津金木秘占法

「天児屋根命は神事の宗源を主さどる者なり。故れ太古の卜事を以て仕へ奉らむ」

と『日本書紀』に明記されていることからも分明なように、古神道において占いは、幽邃蒼古、神さびたる存在である。

もっとも、占いといっても種類は多い。亀の甲を火に炙って生じるひび割れによって吉凶を占う亀卜神事をはじめとして、釜鳴神事、粥占神事、弓射神事などなどだ。

そのなかでも、神と我、我と万有との媒介物として神聖視されるところの天津金木を用いる占法は、形相をもって宇宙の玄兆を明示するとされ、古神道の世界においては、非常に重視されるところの秘法である。

さて本来は、蓍萩の枯れ茎などを用いて象（易でいう卦に当たる）を出し、天津金木を幾柱も組み合わせて占うのであるが、ここでは簡略化して、付録の金木を使った

金木二柱組の例

はじめ（左手）に緑の金木が出て、次（右手）に黄色の金木が出れば、それは「水地—興の象」ということになる。

また、はじめに青の金木が出て、次に黄色の金木が出れば、「天地—安の象」ということになる。

緑 ● ● ● 水
黄 ● ● ● ● 地
＝ 興の象

青 ● 天
黄 ● ● ● ● 地
＝ 安の象

金木二柱組と四柱組の占い方を紹介しよう。

[占1] 金木二柱組の占法

まず、付録の金木32枚（各色8枚ずつ）を机の上に置く。そして、占いたいことを念じながら、よくかき混ぜる。かき混ぜたら山にしておき、次の神名を唱えていく。

「天之御中主神
高御産霊日神、神産霊日神
天之常立神
宇麻志阿斯訶備比古遅神
豊雲野神、国之常立神
宇比智遅神、妹須比地遅神
角杙神、妹活杙神
意富斗乃智神、妹大斗乃弁神
淤母陀琉神
妹阿夜訶斯古泥神」

神名を唱え終わったならば、（手の平を上に向け）左の手を上、右の手を下にして、両手で32枚の金木を持つ。そして瞑目し、伊邪那岐神、伊邪那美神を念じつつ額の前に金木を戴くのである。そして、「アナニ」と軽くなごやかに親しみのこもった声で唱え、「ヤシ」と強く唱えて両手に力を入れ、「エ」と一刀両断の勢いで、戴いた金木を中央で2つに分け、左右の手にそれぞれ収めるのである。

次には、「ヲトメヲ」と唱えつつ左手を左方横に開き（このときも伊邪那岐神を念じる）、「ヲトコヲ」と唱えつつ右手を右方横に開く（このときも伊邪那美神を念じる）。

そして、両手の金木を静かに机の上に置く。

次に、左手に切り分けたほうの金木の山から、いちばん下の金木を取りだし、机に置く。また、右手に切り分けた金木は、いちばん上のものを取りだして、前に取りだした金木の下に並べるのである。

つまり金木は、最初に出たものを上に、次に出たものを下にして配置するのだ（右のコラム参照）。

あとは2つの金木の組み合わせによって、118ページの「象意解釈」を読み、吉凶を判断すればよいのである。

[参考] 占断の基本となる四象

本来は、観想法に習熟するにつれ、天津金木を置き並べて見つめているうちに、その象が暗示するさまざまな意味が少しずつひらめいてくるようになる。

したがって、先の作法で選びだし、置き並べたものを観想し、その玄意を読み取られることをお勧めするが、とりあえず研究のよすがとして、天・火・水・地の四象のもつ意義の片鱗を述べることとする。

さて神道は、邦家経綸をもって本位とするので、以下のように、国家の構成要素を四象に当てはめて考えることが基本となる。

[君＝天] 君は極身であり、統を継ぎ、極を垂れ給う最上位の存在ということで、天に属する。

[大臣＝火] 大臣は大身であり、多数の部下を率い、君徳をあまねく光被するところから火に属する。

[小臣＝水] 小臣は小身で地方官であり、大臣の命を報じ、さらに一般にあまねく君徳の偉大さを伝え、遵奉させる役目なので水に属する。

[民＝地] 民は手身であり、大地に根づき、手足を働かせて、それぞれの使命を遂行する人々をいうので地に属する。

以上のことをベースにして金木を見ていくと、象のもつ意味が理解しやすい。次ページの「象意解釈」の参考にもなるので、これだけは覚えておくといいだろう。

また、単に吉凶のみをみるのなら、上下の金木の●点を見比べ、●点の多い金木が上にあるときは凶と判断して、だいたいは間違いないだろう（こうした象を逆位という）。

[象意解釈] ここでは、天津金木の占示を略解したが、天津金木の真髄は、文字を読むだけでわかるようなものではない。配列したり、変転させたり、かつまた観想し、天津金木三昧に入ったときにはじめて悟得されるものである。冷暖自知、自ら天津金木を造作し、運用して、その醍醐味を体験されることをお願いしておきたい。

天天—栄の象
栄はサカアと読む。上天下天のもっとも熾烈な状態である。上にも下にも君威が一貫し、ほかに何も認むべきものはない象で、必ず栄えのくる暗示がある。

火天—廃の象
廃はスタルと読む。上火下天である。大臣が威をほしいままにし、君が圧せられている相。あるいは風が火を消さんとしている姿で、頽廃の暗示がある。

水天—失の象
失はウシナウと読む。上水下天で、小臣、上に跋扈して、君威をないがしろにしている象で、失態続出、あるいは物を失う暗示がある。

地天—危の象
危はアヤウシと読む。上地下天である。民上にあって君を圧迫している象。天地逆転した相で、実に危険で、あやうい暗示がある。

天火—治の象
治はオサメルと読む。上天下火の状態で、君徳上に栄え、あるいは君威上に輝き、下に大臣が君命を奉じ、下に照り渡っている象で、物事の治まる兆し。

火火—盛の象
盛はサカンと読む。上火下火である。大臣の威が上下に輝いている象である。あるいは火気旺盛の相で、万事、勢いの盛んなる暗示がある。

水火—争の象
争はアラソウと読む。上水下火で、小臣上にあって大臣を抑えようとしている象。あるいは雷鳴の相で、争闘を招く暗示がある。

地火—亡の象
亡はホロブと読む。上地下火で、火が滅する相である。また、大臣が下におり、民に圧せられている象で、国家、家などの滅亡を暗示する。

天水—存の象
存はタモツと読む。上天下水である。君徳上に栄え、小臣が君命を奉戴し、下に輔翼の実ある相で、つつがなく、物事が存続する意味がある。

火水—閑の象
閑はオダヤカと読む。上火下水である。大臣上に照り、政道に励み、下に小臣よく従い、道を広めている象で、閑安なる意が存在する。

水水—衰の象
衰はオトロウと読む。上水下水で、小臣が上下に威をほしいままにしている象。水があらゆるものを侵し、衰微を免れがたい暗示がある。

地水—乱の象
乱はミダルと読む。上地下水で、水は隠れてそのままでは役に立たぬ相。また、民上にあって小臣を圧伏している象で、そこから擾乱を招く意味がある。

天地—安の象
安はヤスシと読む。上天下地である。君徳上に栄え、国民下に楽しむ相であり、あるいは君のもとに民がその業に安んじている象で、何事も安泰の意味。

火地—得の象
得はウルと読む。上火下地で、上に大臣がその任を果たし、下に民が努力している象で、太陽の輝きが大地に恵みをもたらし、収得多き意味がある。

水地—興の象
興はオコルと読む。上水下地である。水が大地にしみ込むように、小臣の威を民が奉じている象で、これから物事の復興していく意がある。

地地—枯の象
枯はカレルと読む。上地下地である。民のみがその威をほしいままにし、君徳枯れるの相である。ゆえに、大義の枯死枯渇を意味する。

[占2] 金木四柱組の占法

天津金木は、本来、二柱、三柱、四柱と組み合わせていくことによって、より詳密にいっさいのことが明らかになっていくものである。だが、紙幅の関係で、組み合わせの占法すべてをここに書きつくすことはできない。

よって、比較的わかりやすいと思われる四柱組による実占を紹介し、読者の参考に供しよう。

まず四柱組を得る方法だが、二柱組と同じやり方で二柱の金木を取りだして並べたあと、右手の金木の束を取る。

そして、伊邪那岐、伊邪那美の神を念じ、前と同じく「アナニ」「ヤシ」「エ」「ヲトメヲ」「ヲトコヲ」と唱えて左右に分けて二柱を取りだし、先の二柱の下に、左手の金木から並べるのである。

すると当然のことであるが、四柱が縦に並ぶことになる。それが求められた象となる。

●実占例1

さて、四柱組で次ページ図①のような象が得られたとする。これによって、病気の有無を判定する

法を説明しよう。

それにはまず、基本相の「大倭豊秋津島」といわれる四柱の形が基準になる。図②のものだ。

この基本相は、第一位（天座）は頭、第二位（火座）は胸、第三位（水座）は上腹、第四位（地座）は下腹と定められている。

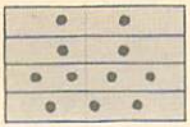
そのうえで、得た象を基本相と比べて判定するのである。判定の要概は次のとおり。

❶天が第一位にあり、火が第二位にあり、水が第三位にあり、地が第四位にあるのを、本位に本位があるという。

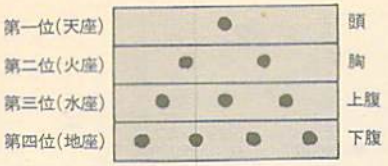
❷本位に本位があれば、心身が健全であると判断する。

❸本位に近いもの、遠いものを考慮し、本位に遠いものがあれば異常ありと考える。

図①



図②



この場合、本位に近いとか遠いというのを表示すると、図③のようになる。

そこで、いま得られた四柱の結合（図①）と基本相を比べてみる。

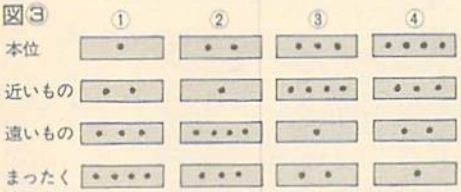
まず第一位は、天の本位のところに火があるが、さほど気にする必要はない。

第二位は本位に本位がある。したがって、まったく問題なし。

さて、第三位と第四位は、本位に本位がなく、近いものが入っているが、逆位（上の●点が下より多い）になっていることに注目しなければならない。

地の金木が第四位の本位にあれば、身体は健全である。ところが上腹の位置にあるので、この場合の地は汚物とみて、上腹には汚物が溜まっていると判断。

図③



また第四位には、本位は地のはずであるのに水がある。そこで、下腹は下痢の状態にあると判断するのである。

ここで注意しておくと、判定の要概の追加として、

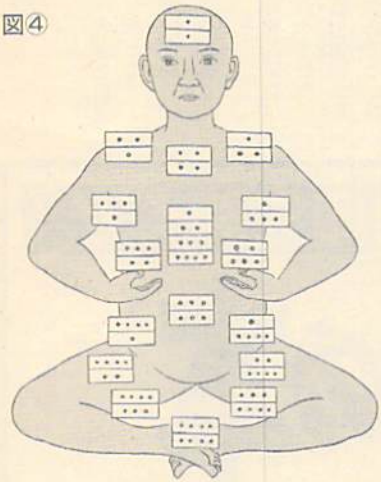
❹二柱組の場合の吉凶と同様に、原則として、下の金木よりも●点の多いものが上になっているとき（逆位）は凶とみて、不健康と判断する。

であるからこの場合、第三位と第四位が問題になったのである。ただし、第一位と第二位は、第一位に火があっても、下の二位も火であり、●点は多くないので、気にする必要はないといったのだ。

さらに要概の追加として、

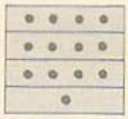
❺一般的には、第四位に水があれば下痢、火があれば体中に熱があるとみ、天があるときは風気（風邪）と判断するとよい。

図④



●実占例2

病占をあと一例みてみよう。ある病人を判断して次のような金木の配列を得たとする。



この場合はほとんどが本位に遠く、しかも逆位になっているものもあるから、ひどい病気であると判断する。身体全部が悪いといっても、どこかに病源がないことはない。金木の判断においては、下位に逆位のものがある場合には、そこを病源と見る。この場合は第四位に天があるので、風気であると判断するのである。

そしてこの病人は、風気がもとで頭が重く、胸部も板のように硬化し、胃腸も悪く食欲が進まず、身体が衰弱していると判定するのである。

もっとも、このような古法だけでは、身体の細かい様子は判断できない。本来は図④のように、身体の各所に天津金木が配当されており、そうしたことも踏まえて判断されるべきなのだ。

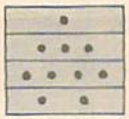
これについては詳細を述べる紙幅がないので割愛するが、各人において研究していただきたい。

[占3] 金木による人物占断法

次に、簡単に相手の性質を判断する法を紹介しておこう。

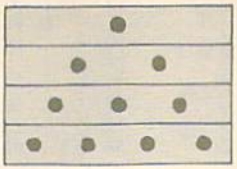
この場合、金木の占法では、人の性質を知情意の3つに分けて判断する。先ほど示した基本相の第一位（天座）は知性・理性を、第二位（火座）と第三位（水座）は感情、第四位（地座）は意志を知るところと定まっている（図⑤参照）。

そして、もし相手を占って次のような金木結合を得たとする。



第一位は、天の座に天があるのでなんら問題ない。その人は知性の点においては明晰であると判定してよい。

第二位は火の座であるが、ここには水があり、先に示した図③でもわかるように、もっとも本位に遠いのである。そこで感情の点においては、冷淡な人物であると判断できる。



図⑤

しかも第三位には、意志を表現する地が入っている。そこで、この人の感情はきわめて固定的で融通のきかないもの、との判断が追加される。

そして、意志を知る第四位には、感情を象徴する火が入っている。地に地がある場合は意志強固な人であるが、そこに火があるということは、感情に流れやすく意志薄弱であると思われる。

総合的に判断すれば、理性的な人物であるが、きわめて感情が冷淡で、意志薄弱な人物であるということになる。

まだまだいろいろな実例をあげて金木占法を説明したいのだが、天津金木の判定は、本来、固定的なものではなく、その事件に応じて無限にある。そうしたことのすべては、残念ながら紙幅の関係で書くつくすことができない。

また、金木を自在に運転活用操作することによって、運命を変える秘儀などもあるのだが、これまた記すスペースがない。

だが、観想法に習熟してくると、そうしたこともおのずからわかってくるものである。各自、観想法に励み、創意工夫していただきたいものである。

Books Esoterica —10

古神道秘法の封印を開く!!

古神道の本

甦る太古神と秘教霊学の全貌

7月20日刊行

定価1000円(税込)

★隠された秘教体系・古神道とは何か——
太古神の復権、日本霊学の樹立、霊的国防論……

★古神道家の系譜——
平田篤胤・本田親徳・大石凝真素美・出口王仁三郎・友清歓真・宮地水位・荒深道斉・九鬼盛隆・川面凡児・岡本天明……

★神伝秘法の世界——
言霊・数霊・鎮魂法・帰神法・太占・太古神法……

そのほか★神道霊学の理論★秘教大図録★秘教的日本論★カムナガラのサイエンス★秘教神道書100冊……など満載!!(詳しい内容は本誌目次前の折り込み広告をご覧下さい)

学研 NEW SIGHT MOOK

第5章 天津金木神事法

金木学による国生み神事の解釈

天津金木の秘占法により、自分や第三者の運命をみることができるのは前述したとおりである。だが吉凶を占うことは、天津金木占法においては第二義的なものでしかないのだ。

この秘術においては、俗間の占いとは異なり、天地の玄理を解明し、人間の真性を知り、惟神に定められた使命を霊悟し、それに邁進することが第一義なのである。

その目的のためには、天津金木によって神典『古事記』を解読することが捷径である。

天津金木と『古事記』との関係は、楽器と楽譜の関係にたとえることができよう。

名人が持てば、よい楽器はそれだけで妙音を発するだろうが、そのうえにすぐれた楽譜があれば、よりいっそうの楽曲を奏でることができ、その真価を発揮できる。

同じように、古神道の神器である天津金木を名人が使えば、自在に宇宙の真理を開顕してくれるが、『古事記』をもとにすれば、よりいっそうの妙験を顕してくれるのだ。

このような事情から、金木による神典解読は、天津金木学の奥義ともいえるものだ。ただしここで、天津金木による神典解釈の全部をのせることは、残念ながらスペースの関係でできない。

ここでは「象意解釈」に示した「金木二柱組」による、16組の結合について少しばかり触れておこう。

これは天津金木学においては、神典の伊邪那岐、伊邪那美二柱の神の〝国生みの神事〟に対応するものとされている。

たとえば「ミコアハチノホノサワケノシマ　ウミタマフ」と記された「ホノサワケ」のホは火であり、サは水である。ホノサワケは火と水が結合して成立した島であって、金木においては上火下水の「閑」が当てられる。

同様の方法で生みだされた島々を金木で見てみると、図⑥のようになる。これが岐美二神の生み成した大八洲の相とされる。

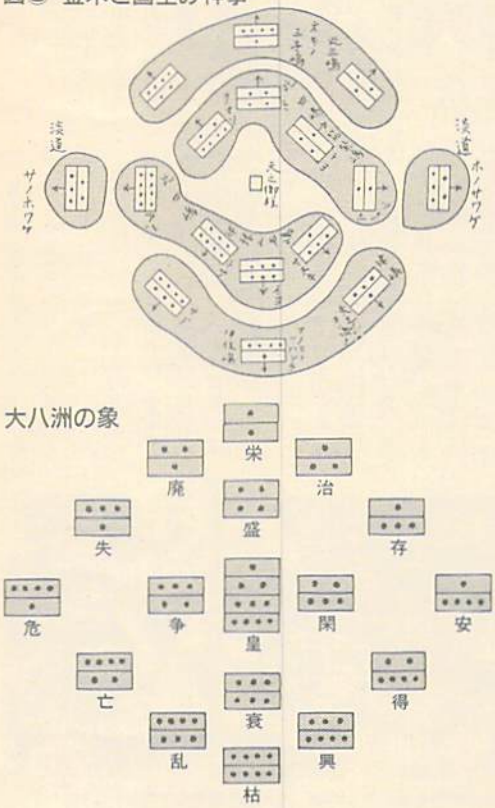
われわれは大八洲をわが国の島だと思っているが、それは一面的な解釈で、八とは八対の意味であり、洲とは呉服類の「縞」であって、模様である。つまり、宇宙間の組織紋理である。

これが、1栄・枯、2盛・衰、3治・乱、4興・廃、5安・危、6閑・争、7存・亡、8得・失と八対の島を成就するために、これを「大八島国」と唱えるのである。

天地間いっさいの事象において、栄枯盛衰が起こる根本原因は、この理にもとづく。この組織紋理の錯綜、無限の交渉が、吉凶、禍福のことごとくを産霊なすのである。

あらゆる神業、人事、万象の変転も、すべてこの金木八対の形相のほかには出ず、この相が、万神、万生、万有のうえに起こるところの、いっさいの因となり、果となり、縁となり、報となり、変転応現するいっさいの根源力となっているのである。

図⑥ 金木と国生み神事



人類破局を回避する唯一の神鍵！

最後に『古事記』と天津金木の関係、そして山本秀道・大石凝真素美ら神道オカルティストたちが、なぜ天の岩戸開きを真摯に追求したのかをいまいっそう明らかにして、ペンを置くことにしよう。

「現存するわが国最古の書」である『古事記』の著された年代は和銅5年（713年）で、『古事記』成立以前の帝紀や旧辞、また数多くの口伝えなどをもとに成立したとされている。

しかし、真素美はその弟子・水谷清に、驚くべきことを語っている。それは、『大日本史』に記された天皇を使役し奉った山本家の遠祖は、そのようにして天武天皇を山本家にひそかに引き寄せて、『古事記』を伝えたというのである。

そして、時きたって『古事記』の秘儀を探ろうとする人のために、真の解読のための神器を御神体として家に残した。それが天津金木であり、山本秀道の家に代々伝わったものだったというのだ。

大石凝真素美やその弟子・出口王仁三郎などによれば、神典『古事記』には、歴史の書、倫理の書、言霊の書、天津金木の書、予言の書として、幾とおりもの読解の方法があるとされる。

ちなみに、現在、予言の書として『古事記』が再解読され、過去・現在・未来にいたる時代の趨勢さえも完全に把握し、近い未来における全人類の破局をも予言していることが指摘されている。

大石凝真素美も『古事記』と天津金木を通して世の中の終局を見た。それは物質文明の果ての、地球上における生命体の滅亡、全生命体のほとんどが滅び去る大破局であった。『古事記』において、いっさいが暗黒となる天の岩戸隠れに象徴される絶滅の悲劇が、再び繰り返されようとしているのだ。

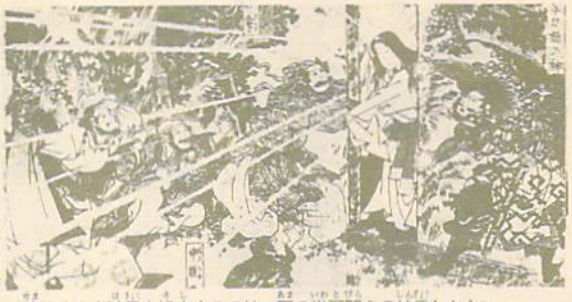
生成、発展、そして消滅……。自然に定められた輪廻の空間に、だが、一筋の灯明が見出せないものなのか。

確かに『古事記』には、人類破局の予言がある。しかし、いかにして回避しうるか、どうしたら生き残れるか、それをも啓示しているのだ。そのための深秘の扉を開けうる唯一の神鍵が「天津金木」なのだった。

大石凝は神示や天津金木を用いた『古事記』の解読から、物質文明の果てにおける破局を見通した。そして、それを防ぐには、霊的文化の開顕しかないことを悟ったのだ。その開顕のために三大皇学の発揚に努め、霊的文化の開花を後世に託したのである。

天津金木学は、第一歩を机上の研究に始め、やや研究が進んだならば、これを神典の読解に応用し、さらに進んだならばこれを心身に体験し、天地に参じてこれを行い、最後に、活現しつつある永遠の本舞台に登場して、神格者としてその使命を果たすべきものとされている。

天津金木という秘術に触れたあなたは、神定めにより、霊的文化を開花させ、世界を救う使命を担わされた、神格者のひとりなのかもしれないのである。



⬆迫りくる大破局を阻止するのは、天の岩戸開きの神業しかない。